

シリコンバレーで落穂ひろい 食品ロス削減にとどまらないアメリカ都市部で行われる グリーンング活動

早稲田大学創造理工学部建築学科教授 矢口 哲也

写真1
グリーンングイベントを
行った住宅の裏庭

グリーンング (Gleaning) という単語を英和辞典で調べると、「落穂ひろい」とあります。一般に、「落穂ひろい」というミレーの名画にあるように、貧しい農村社会での助け合い精神により支えられた活動を思い浮かべる読者が大半だと思いますが、現在欧米で行われているグリーンングは参加者も活動の対象も広がり、一般市民による都市部で行われる食品リカバリーの活動になりつつあります。本稿では、アメリカの都市部で行われるグリーンングの事例を紹介し、市民の自発的奉仕活動による食品ロス削減への取り組みと、その波及効果について報告をしたいと思います。

アメリカで行われているグリーンングは、大きく二つに分けることが可能です。一つは、フードバンク組織や宗教法人がそのネットワーク力を活かして大規模農場や食品産業と協力して行なっている食品リカバリー、もう一方は個人やNPOが主体となり、地元コミュニティで行う小規模な食品リカバリーです。後者の小規模なグリーンングの活動は、1996年成立の食品寄付による事故免責制度、ビルエマーソンサマリタン食料寄付法と2008年のリーマンショックを引き金にして急激に活発化しています。筆者が行なった調査では、これらの団体のほぼすべてが、都市部での食品ロスの削減をその目的として掲げ、都市部に残された小さな農地や庭の果樹をその対象としてグリーンングを行なっていました。

一例としてカリフォルニア州サンノゼ市を拠点に活動するVillage Harvest (以下VH) という団体をとりあげたいと思います。VHはクレイグ・ディセレンスにより2002年

に設立された比較的古いグリーンング活動を行うNPOで、クレイグのリーダーシップのもと約30名のボランティアリーダー、そして1,200名を超えるボランティアが登録されています。VHが活動拠点とするシリコンバレーの中心地であるサンノゼは、意外にも1950年代までは肥沃な農業地帯として知られていました。その後急速に都市化が進んだものの、住宅地の裏庭には当時の果樹がそのまま残された地域もあり、VHはこれらを対象に、春にはサクランボ、夏にはアプリコットや桃、秋には洋梨やザクロ、冬にはレモンやオレンジなど年間を通じてグリーンング活動を行なっています。他のグリーンング組織と同様、クレイグも身近な都市環境の中で消費されたいくさんの果実を見つけ、これを必要な人に届けたいとの思いでVHを設立しています。

VHの収穫イベントは以下の手順で行われています。

① VHが市民から登録されている収穫時



写真2 参加者に収穫方法を説明するクレイグ(左)

期に適した庭の果樹を選定、これを少数人数のグループが作業可能な地域・作業量に分割し、収穫イベントとしてVHウェブサイトで収穫ボランティア募集を告知

② 収穫イベントを担当する、8~10名程度の一般ボランティアとボランティアリーダーでチームを結成

③ イベント当日早朝、ボランティアとボランティアリーダーは収穫を行う住宅地で集合(写真2)。収穫器具や食物輸送用のバンの準備、衛生・安全管理、収穫器具の使用法についての説明はボランティアリーダーが担当

④ ボランティアは、約2~3時間、屋外での収穫作業(写真3)。収穫物の一部は、庭の所有者に、一部は参加者に、そして収穫の大半は提携を結んでいる近隣の教会やフードバンクへ輸送

一読すると、収穫イベントの計画と実行は誰にでも容易にできそうに聞こえますが、ドナーとなる果樹の種類、収穫量と時期の把握、ボランティアリーダーとボランティアのマッチング、収穫物を提供する団体の需要把握、収穫物の輸送手段確保などさまざまな要素が綿密に考慮される必要があります。VHでは、幸運にもコンピューターリテラシーの高いスタッフにより独自の果樹・ボランティアのデータベースを作り効率的な運営を行なっていましたが、

参考文献

矢口哲也：都市部での現代的グリーンングプログラムの持続可能な運営に向けた課題とコミュニティで果たす役割、日本建築学会計画系論文集、第85巻、第772号、pp.1263-1273 (2020)



写真3 収穫された洋梨と参加者。この日は20箱、約240kgを収穫

他のNPOへの調査からは、労働集約型の収穫イベントを持続的に行うためには、果樹やボランティアなどのリソース管理が大きな課題として挙げられていました。

一方、収穫イベント参加者へのインタビュー調査では、参加の動機として奉仕精神、環境意識といった理由以外にも、健康なライフスタイルの実践や地域で育つ食物への関心を動機として挙げる参加者もいることが特徴的でした。特に、繰り返し参加するボランティアは、食品ロス削減に向けた奉仕活動の一方で、新鮮な果実を受け取る楽しみを動機づけとし、楽しみながらグリーンングを行なっている様子が見られます。VHによると、最近では近隣のIT企業が収穫イベントを社員研修の一部として利用するなど、グリーンング活動は設立当初の食品ロス削減という目的を超え、住民へ地域の環境や食材への関心を高める機会の提供や、屋外での健康的な活動を兼ねた奉仕として受け入れられつつあります。

私たちの暮らす日本でも、意外に多くの果樹が植えられています。免責に関する法整備の遅れもあり、わが国では落穂ひろい活動はまだ一般に認知されていない状況ではありますが、近い将来、日本の都市でも落穂ひろいが一般的な季節の風景になるかもしれません。